

## 第 22 回和紙文化講演会 基調講演概要

### 演題 1：料紙に見る藍と紫

講師：名兎耶 明（公益社団法人五島美術館常務理事副館長）

#### 概要

平安時代以来、仮名用の紙として知られる装飾料紙には、さまざまなものが見られるが、基本となるものに藍と紫の色がある。奈良時代から藍と紫が重視され、そこに金銀を加えた装飾は、以後もわが国の装飾の根幹にあった。奈良時代は、濃い紫の紙に金泥で写経した紫紙金字経や濃紺の紙に銀泥で紺紙銀字経をつくり、色替わりの紙に写経する色紙経などがあった。平安時代に入っても、藍と紫はわが国の色の基本として存在し、紙の上下に雲状に藍を漉き込んだ、雲紙（打ち曇り）や空に浮かぶ雲のように藍と紫を混ぜた飛雲文様が料紙の定番としてあった。藍の繊維の漉き込み方や染め方で様々な青系の色を生んでいる。飛び雲文様は平安時代の内に終わってしまったが、雲紙は鎌倉時代から江戸時代、さらに現在まで続く装飾である。ただし、そのデザインや色の使い方は時代が下がるにつれて品格が減少しているようである。平安時代の雲紙は、書写される筆跡や内容を引き立てる要素ではあっても、それを壊すことはないのである。あくまでも下絵と同じで書写される書を第一に考えて紙の装飾がなされている。そうした、雲紙と、飛雲文様の過去の例を示しながら、その変遷をたどってみようと思う。

### 演題 2：越前和紙と時代との関わり

講師：増田勝彦（和紙文化研究会副会長）

#### 概要

奈良時代以降、和紙は中韓に比較しても日本独自の発展を見ました。延喜式の記述に代表される古代の和紙、鎌倉・室町時代中世の和紙、近世江戸の和紙、そして明治以降、機械製紙に対抗する中で開発された和紙が、それぞれの時代とどのように関わって来たかについて概観しようと思います。その中で、越前和紙はどのような存在で有ったのでしょうか。資料を拾い集めるなかで、越前和紙の歴史の長さや技術の広がりや姿を現らわすことを期待しています。

### 演題 3：受け継ぎ、研ぎすまし、そして革新 —越前紙漉き職人のフロンティア精神—

講師：石川満夫（元福井県和紙工業協同組合理事長）

#### 概要

越前和紙は、一言で片付けることは到底できません。日本一と称されるふっくらとして優美な奉書、紙王と謳われる精緻な肌合いの鳥の子、手技が冴える檀紙、そして千変万化の美術工芸紙、加えて明治の新時代を画した局紙などなど、越前和紙は、実に多種多様で、その技術・技法の多彩さは他産地をはるかに凌駕します。しかも、そのいずれもが洗練された美的感性によって生み出された高い品位をもっていることも特筆すべき大きな特色です。

越前和紙の先人たちは、その長い歴史のなかで、伝統の根底の技を正しく受け継ぎ、それを研ぎすまし、そして工夫をこらして新しい技術・技法を編み出し、その時代の求めに応える最良の紙を創りあげてきました。常に革新しつづけて、新しい時代の「用」と「美」に供する“時代の紙”を創ってきたことこそ、越前和紙の真骨頂と云えます。

「伝統とは、変革の積み重ねである」ことを、越前和紙の歴史の足跡は、如実に実証しています。越前和紙の紙漉き職人は、既存にとらわれない柔軟な思考力と進取のフロンティア精神を培い、越前和紙の創造力を育んできました。それは、まさに和紙の未来の展望につなげるキーワードです。

和紙の「素材力」に光をあてた越前和紙の多彩な技術・技法の展開を考察し、その創造力を検証します。